

陸連時報 三

2018
平成30年

7 月号

題字は平沼亮三(初代陸連会長)の書

目 次

2018年シーズン序盤報告(強化委員会).....	246
シンガポールオープン参加報告.....	250
(強化委員会女子リレーオリンピック強化スタッフ兼コーディネーター 太田涼)	
AIMS理事会・総会報告(専務理事 尾縣貢).....	251
国際陸連(IAAF)競歩委員会報告(強化委員会男女競歩オリンピック強化コーチ 今村文男).....	252
長野マラソン「日本陸連ランニングクリニック」(普及育成委員会ランニング普及部部长 前河洋一)	
.....	253
日本陸連栄養士会 第5回カンファレンス2018開催報告(食育プロジェクトメンバー 浜野純).....	254
日本陸連栄養セミナー2018開催報告(食育プロジェクトメンバー 鈴木いづみ).....	255
国際陸連ヘルス&サイエンスコミッション会議参加報告(医事委員長 山澤文裕).....	256
2018数字で見る陸上競技Vol.1 都道府県公認競技会数.....	257
2018年度A級B級自転車計測員会議報告(施設用器具委員会).....	258
大会観戦ガイド.....	259
陸協NEWS.....	260
事務局からのお知らせ.....	262

公告

「陸連時報」は公益財団法人日本陸上競技連盟定款第4条第6号の「機関誌」の性格を有するものでありますが、毎月「陸上競技マガジン」と一体として発行しています。陸上競技に関する啓発記事のほか、必要に応じて、評議員会、理事会の決定事項、各専門委員会、事務局からの報告、通達も掲載いたします。本時報に掲載した通達は、公式に通達したものと取扱わさせていただきますので、登録競技者は本時報の掲載内容にご注意下さい。また、陸上競技指導者の方は、所属競技者にお知らせ下さるようお願い致します。

公益財団法人日本陸上競技連盟

2018年シーズン序盤(セイコーゴールドングランプリ終了時点)報告

強化委員会

「全体総括」 強化委員長 麻場一徳

2018年トラック&フィールドシーズンが、日本グランプリシリーズとともに始まった。5月20日(日)に開催されたセイコーゴールドングランプリが終わり、一区切りついたところで、今シーズン序盤を総括したい。

日本グランプリシリーズは、今シーズンから、グランプリプレミア(GPP)が4大会、グランプリ(GP)が9大会と、昨年までとは大きく様変わりし、アスリートたちの力を発揮するチャンスが広がり、昨年までとはまた違った盛り上がりが期待された。また、2018年シーズンは、シニアではアジア競技大会、ジュニアではアジアジュニア選手権及びU20世界選手権が主要国際競技会となり、これらの大会への出場権をかけて、例年以上に多くのアスリートがしのぎを削ることとなった。

さらには、国際陸上競技連盟(IAAF)が昨年11月に、2018年シーズンからワールドランキング制度の導入を表明した。この制度は、アスリートの個々のパフォーマンスに記録ポイントと順位ポイントをつけ、それらを合算したものをパフォーマンススコアとしてランキング化するものである。2019年ドーハ世界選手権、2020年東京オリンピックは、この新たなランキング制度を用いた参加資格システムが採用される見込みであり、今年9月には、各種目のランキングが発表されることになっている。現段階では未確定な部分もあるが、これまで国際舞台で戦う第一歩として捉えられていた「参加標準記録」という出場資格の概念を大きく変える必要が生じているのは確かである。つまり、2020年東京オリンピックに向けて、このワールドランキング制度を意識しながら競技会出場などを戦略的にプランニングすることが求められるようになってきているのである。

そのような背景のもと今シーズンがスタートしたわけだが、例年と比較して主力がスロースタートという印象もある。その中で強化委員会が設定した東京オリンピックスタンダード記録を突破した選手は、男子400mHの安部孝駿選手(デサントTC)(安部選手はオリンピックBEST8記録も突破)、男子400mHの岸本鷹幸選手(富士通)、男子走高跳の戸邊直人選手(つくばツインピークス)、女子5000mの山ノ内みなみ選手(京セラ)、女子10000mの阿部有香里選手(しまむら)であった。安部選手、岸本選手、戸邊選手は、実績のある選手であるが、ここ何年か本来の力を発揮できずにいただけに今シーズンの活躍が楽しみであ

る。また、山ノ内選手は今シーズン自己記録を大幅に更新して勢いがある選手であり、今後が注目される。他にも、男子砲丸投で中村太地選手(チームミズノ)が日本記録を更新する18m85を記録したことは特筆される。まだまだ世界に及ばない記録ではあるが、回転投法を継続的に取り組んで成果をあげてきただけに、今後が楽しみである。

また、セイコーゴールドングランプリにおいて男子4×100mリレーの特別レースを実施した。従来、リレーは大会の初めの部分で実施され、100mがメインイベントとして位置づけられてきたが、男子短距離スタッフの強い意向もあり、テレビ局の多大なる協力のもと実現した。日本代表Aチームとしてリオデジャネイロオリンピック銀メダルメンバーのオーダーが再現され、他チームを圧倒するパフォーマンスを示すことで大会を盛り上げることができた。37秒85という素晴らしい記録(今季世界最高記録)も達成し、今後が楽しみであるとともに、このような取り組みを他の種目でも試みていきたい。

日本グランプリシリーズとは別の話題になるが、日本の競歩陣が世界の舞台で素晴らしい活躍を成し遂げた。5月5日、6日に太倉(中国)で開催された第28回世界競歩チーム選手権において、男子50km、男子20kmの両種目で見事団体金メダルを獲得した。50kmにおいては、圧巻の個人金(荒井広宙選手、自衛隊体育学校)、銀(勝木隼人選手、自衛隊体育学校)、銅(丸尾知司選手、愛知製鋼)独占。20kmにおいても、新鋭の池田向希選手(東洋大学)が個人金メダルを獲得した。また、U20男子10kmでは団体銀メダルを、U20女子10kmでは藤井菜々子選手(エディオン)が個人銅メダルを獲得し、将来を担う選手も育っている。我が国競歩チームの取り組みは他の範となるものであり、東京オリンピックに向けて他種目にも取り入れていきたい。



「トラック&フィールド報告」 T&Fディレクター 山崎一彦

【男子】

2018年のトラック&フィールドシーズンではアジア大会が最重要競技会となる。ジャカルタ2018アジア競技大会選手選考要項に記載されている「東京オリンピックターゲット記録：以下オリンピックメダル(OGM)、オリンピックBest8(OG8)、オリンピックスタンダード(OGS)」、「アジアメダル期待記録：以下(AGM)」を日本グランプリシリーズ、SEIKOゴールデングランプリ(GGP)においてどのような内容で突破しているかという観点から評価していきたい。

まず、ハイレベルであったのは、男子400mH、走高跳であった。男子400mHの安部孝駿(デサントTC)が静岡国際で48秒68のOG8相当の記録をマークした。安部はGGPでも48秒台で走り、極めて安定した結果を出した。7日目以降のハードル前の失速とスピードダウンを改善できれば、47秒台も可能な状況になってきた。アジアにはA.サンバ(カタール)が47秒57をドーハのダイヤモンドリーグでマークしている。簡単には金メダルが取れない状況であるが、ハイレベルの戦いは東京オリンピックにつながると考える。またOGSの突破は岸本鷹幸(富士通)が昨年秋から調子を取り戻し、今年もまずまずのスタートを切っており、徐々に記録をあげそうな動きとなってきた。AGMは静岡国際で、大幅に自己記録を更新した49秒54の井上駆(順大)を始めとする5名が突破した。昨年は多くの好記録を出した400mHであったが、安定感に欠ける競技者が多かったのも、特に若手競技者の台頭があれば、東京までに期待の持てる種目となるだろう。

OGSレベルでは、戸邊直人(つくばツインピークス)は静岡国際で2m28、GGPで2m30を跳んだ。戸邊は春先の記録会でも2m30を跳んでおり、非常に安定した跳躍から、東京オリンピックメダルターゲット記録である2m36も視野に入ってきている。戸邊は海外でも国内と同様またはそれ以上の成績を残している実績を持っていることから、世界一の実力を持つM.バルシムにどれだけ好勝負を持っていけるかが楽しみになってきた。昨年ロンドン世界選手権代表の衛藤昂(味の素AGF)も2m30は視野に入ってきた。

男子短距離

男子100mではAGM突破者は山縣亮太(セイコー)、桐生祥秀(日本生命)、ケンブリッジ飛鳥(Nike)、小池祐貴(ANA)だった。特に山縣はレースのうまさによって一段と磨きがかかり、得意のレース前半の飛び出しがなくてもまとめることができている。完全にワールドクラス入りした蘇炳添(中国)との好勝負が期待できる。

男子200mはGGPで藤光謙司(ゼンリン)が20秒61で日本人では先着。静岡では原翔太が日本人1位。記録では染谷佳大(中央大)、犬塚渉(順大)が20秒65と若手の躍進があったが、アジア大会での活躍という観点からは、まだまだ決め手に欠ける内容であった。

GGPでは謝震業(中国)が20秒16の中国新記録を更新した。日本選手権では20秒前半の競技者を期待したい。

400mは、静岡国際で大学1年生ながら45秒82の自己記録で走った井本佳伸(東海大)、GGPでの完全復帰を成し遂げたウォルシュ・ジュリアン(東洋大)が良い走りを見せた。また、若林康太(駿河台大)も自身初の45秒台をマークし、勢いがあった。アジア大会4×400mRの2連覇もかかることから、どんな条件でも45秒前半が出せるようになっておきたい。

4×100mRはGGPで特別レースを行った。東京オリンピック400mR金メダルプロジェクトとして合宿形式ではなく個人のパフォーマンス向上メインで行い、リレーは実戦で強化をしていく戦略を立てている。GGPは当初400mRがオープニング、100mが最終種目となっていた。しかしながら、短距離強化の方からたつての希望でTV局、陸連幹部の協力体制のもと、400mRを最終種目に移動して個人の100mを競技会の中盤に移動させていただいた。会場の良い雰囲気もあって日本代表チームは37秒85の今季世界最高記録を叩き出した。これらは強化戦略が成功したとあって良いだろう。本レースはリオオリンピックと同様の走順であったが、リレーニッポンという芸術的なレースを見せてくれた。東京を見据えるなら、その他の競技者も育てながら同様の技術ができるようにしていく積極的課題が見えてきた。

男子中距離

800mは、静岡国際で村島匠(福井県スポ協)が1分47秒01の自己記録を更新しAGM記録に到達した。強化対象競技者である室内シーズンで比較的良好な仕上がりをを見せていた川元奨(スズキ浜松AC)は、その後軽い故障のためアウトドアシーズンの出だしが遅れたが、GGPでは1分47秒22と記録を上げてきた。来年からワールドランキング制が導入された際には、室内競技会のポイントも有効となることや、比較的順位がつかやすいことから戦略的に参戦することも検討できる。しかし、海外競技者の中にも室内シーズンと屋外シーズンにおける結果のリンクができていない競技者もいることから、今後は強化情報戦略で分析をしたいところである。

1500mにおいて館澤亨次(東海大)がAGM記録突破する3分40秒49を出したが、ペースメーカーをつけていたが誰もついて行かずに後半追いつけたレース展開であった。ペースメーカーをつけることで記録ができるのではないかと風潮があるが、どのレベルを目指してペースメーカーをすればよいか精査しなければならないと感じた。

男子110mH

110mHは金井大旺(福井県スポ協)、高山峻野(ゼンリン)が織田、GGPと良い動きを見せている。好条件が揃えば13秒3台の日本記録近くまで期待できそうだ。13秒前半を出してくれるとアジア大会でのメダル獲得は確実なものとなる。

男子3000mSC

3000mSCは山口浩勢（愛三工業）がAGM記録を上回る自己新記録の8分35秒82を兵庫リレーカーニバルで出した。昨年よりも力強い走りができていることから、ハードリングにこだわりを持って技術をさらに磨いていくことが重要であると考えられる。

男子跳躍（HJを除く）

AGMを複数名突破している棒高跳は、インドアシーズンで5m60を跳んでいる山本聖途（トヨタ自動車）は屋外では記録を伸ばせていない。萩田大樹（ミズノ）、澤野大地（富士通）、江島雅紀（日大）が5m50とAGMを記録しているが、メダルカテゴリーであることから、アジア大会に限らずダイヤモンドリーグなどに参戦するレベルに到達したいところであるが、出足は悪い状況である。日本選手権で5m70あたりを跳んで弾みをつけてもらいたい。

走幅跳では、AGM記録を突破していないが追い風参考記録で川島鶴楨（順大）が水戸招待で8m04（+2.7）をマークした。

男子投擲

全ての種目においてアジア大会選考期間内のAGM記録の突破は見当たらない厳しい状況となっている。とくにメダルカテゴリーであるやり投は80mを投げていない状況である。

厳しい中での光明としては、砲丸投で中村太地（チームミズノ）がGGPにおいて18m85の日本新記録を更新した。まだアジア、世界とは離れている種目であるが、回転投法での継続的な試みが進化に結びついている。まずは19m台を日本選手権で投げておきたいところである。

円盤投は、湯上剛輝（トヨタ自動車）が兵庫リレーカーニバルで58m66（大会新記録）を投げた。湯上はワールドチャレンジの戦略として積極的にアジア諸大会への参戦をしており、海外でのアベレージも高い。日本記録も期待できるレベルにある。そしてAGM記録である61m13を視野に入れてほしい。

10種競技

10種競技は、右代啓祐（国士舘クラブ）がTOKYO Combinedで7937点と近年では良いスタートを切っている。5月26、27日のIAAF Combined Challenge（オーストリア）で、海外初の8000点を出せる準備が整った。中村明彦（スズキ浜松AC）も7793点でAGM記録を突破しているが、海外での点数が下がることを予想すると国内では8000点近くの点数が必要となってくるだろう。

【女子】

女子についてはかつてのオリンピック、世界選手権参加標準記録レベルであるOGSの突破はなかった。ワールドランキング制導入以前であればオリンピック、世界選手権の出場は厳しいということとなってしまう。なんとか打開せねばという状況である。AGMの記録を突破した競技者を中心に講評していく。

女子短距離

短距離種目は100m、200mの両種目とも福島千里（セ

イコー）が突破したのみである。若手の台頭がないと、4×100mR、4×400mRの派遣も視野に入れた強化が進むことが困難な状況を打開したいところである。

女子ハードル、7種競技

100mHでは、今季は誰もAGM記録に到達していない。GGPでアジア大会メダル争いをしそうな韓国のJ.ヘリムが13秒18だったことから、13秒1台をコンスタントに出したいところだ。400mHは勢力図が大きく変化し、7種競技でも5821点のAGM記録を突破している宇都宮絵莉（長谷川体育施設）が木南記念で56秒84をマークして好調である。7種競技は宇都宮に続き5672点で山崎有記（スズキ浜松AC）がAGM記録を突破している。

女子跳躍

AGMは日本GPシリーズおよびGGPでは突破者なしに終わった。AGMに一番近かったのは兵庫リレーカーニバルの走幅跳で中野瞳（和食山口）が6m43（+1.4）の大会新記録をジャンプした。試技内容も6m30台を2本跳んでおり、完全復調をみせた。

女子投擲

メダルカテゴリーであるやり投は、今季、宮下梨沙（大体大T.C）がGGPで60m71を投げ、自身の自己記録（16年：60m86）に近づいてきた。斉藤真理菜（スズキ浜松AC）、北口榛花（日大）、久世生宝（コンドールテック）がAGM記録を今季投げている。複数名が常時60m台を投げることで、OG8記録の64m台を目標にしていけることから期待していきたい。

ハンマー投は渡邊茜（丸和運輸機関）、勝山眸美（オリコ）、佐伯珠実（チャンピオンインターナショナル）が静岡国際で揃ってAGMを突破した。

砲丸投、円盤投については、日本選手権で奮起したいところである。

【課題】

今シーズンから日本グランプリプレミア、日本グランプリとカテゴリー分けされたことにより、日本グランプリ競技会への選手出場が促進された。しかしながら年間王者を決めるポイント制などは、強化委員会でも周知が薄く、競技者への動機付けや今後のワールドランキング制が始まるタイミングでの立ち位置などは検討していかなければならないと感じた。

そのワールドランキング制が来季から始めると、大会グレードや順位も重要となってくることから、トラック種目での空きレーンなどがないようにしていくことが望ましいと考える。近年、直前の棄権者による空きレーンを埋める努力を大会運営側もしてくれている。性善説は、参加競技者における事前の不参加、棄権届の提出を厳行したいが、競技会直前や当日のやむ負えない棄権の場合、どうしても空きレーンが出てしまう。海外競技会に習い、見る側にとっても競技者にとっても、最終エントリーで空きレーンの調整を当日でできるようなルールづくりなどの対策は必要と感じた。

「長距離報告」

長距離マラソンディレクター 河野匡

男子長距離強化コーチ 綾部健二、女子長距離強化コーチ 野口英盛

長距離トラックシーズンの幕開けとして、4月から「日本グランプリシリーズ」及び「セイコーゴールデングランプリ陸上2018大阪」開催された。今年度最大の目標である8月ジャカルタで行われるアジア競技大会に向けてまずまずの滑り出しができたと評価している。

各大会報告は以下の通りである。

グランプリプレミア

➤GP プレミア 兵庫リレーカーニバル (4月22日)

男女 10000m

男子は、日本人選手9名、海外選手4名と例年より少数のエントリーとなった。5000mまではアジア大会資格記録(28分00秒00)を十分に狙える13分53秒で通過。大六野秀敏(旭化成)が6000mまで粘ったが海外勢に振り切られた。ケモイ(愛三工業)が27分32秒45で優勝。日本人は大六野が28分21秒75で5位が最高だった。

女子は昨年度日本ランキング上位者と海外選手がエントリーされておらず、好記録を狙うには寂しい顔ぶれとなった。レース展開は、序盤阿部有香里(しまむら)が1周76~77秒でレースを作り、その後7000mまで安藤友香(スズキ浜松アスリートクラブ)が1周77~78秒の安定したラップを刻んだ。野上恵子(十八銀行)が1周74秒にペースアップし阿部、野上、岡本春美(三井住友海上)の3人に絞られ、残り300mでスパートした阿部が32分13秒79で初優勝を飾った。またジャカルタ2018アジア競技大会トラック種目資格記録の東京オリンピックターゲット記録(スタンダード)、アジアメダル期待記録を突破する記録であった。その他、入賞争いが日本選手権参加標準記録(32分30秒00)に迫る記録で競われ、自己記録更新者も多数あり初戦としては収穫の多いレースであった。

➤GP プレミア 織田幹雄記念国際陸上 (4月28日)

男女 5000m

男子は、兵庫リレーカーニバルに続きエントリーされた選手が日本人5名、海外から5名とグランプリプレミアとしては寂しいレースとなった。最初の1000mこそ2分41秒とアジア大会の資格記録突破を狙うには良いペースだったが、その後ペースが上がらず3000mの通過は8分12秒。ラスト600mで大六野秀敏(旭化成)が積極的にレースを動かすも、ラスト200mでディク(日立物流)がスパートし13分34秒46で優勝した。大六野は13分37秒24で3位に入り、兵庫リレーカーニバルに続き日本人選手トップとなった。

女子は優勝したモニカ(スターツ)を中心に海外選手の集団が1周72~73秒のハイペースで進む中、山ノ内みなみ(京セラ)、森田香織(パナソニック)が積極的に食らいついた。3000m手前で先頭から遅れたがハイペースを維持し、山ノ内が自己記録を大幅に更新する15分21秒31で日本人トップの4位に入った。ジャカルタ2018アジア競技大会トラック種目資格記録の東京オリンピックターゲット記録(スタンダード)、アジアメダル期待記録を突破する好記録で、今後に楽しみな選手が表れた。

グランプリ

➤GP 金栗記念選抜陸上中長距離大会 (4月7日)

男女 5000m

気象コンディションが強風と低温のため、記録を狙うには厳しい条件であった。

男子は、アジア大会資格記録(13分30秒00)突破を目指す松枝博輝(富士通)が積極的に先頭に立ちレースを作ったが、終盤では海外勢と市川孝徳(日立物流)の争いとなった。優勝は13分37秒12でキブラガット(倉敷高校)。日本人トップは市川が13分42秒70で4位に入った。

女子は、エカラレ(豊田自動織機)を中心に進んだが、中盤以降日本人選手は徐々に引き離されトップは安藤友香(スズキ浜松AC)の15分45秒66にとどまった。その中高卒ルーキーの矢田みくに、森未来(ともにデンソー)が15分50秒台のタイムで日本人2位、4位に入り、今後に期待を抱かせる結果であった。

➤GP ゴールデンゲームズinのべおか (5月5日)

男女 5000m

男子はA~Lの12組に274名が出場した。最終A組はディラング(愛知製鋼)がペースメーカーを務めた。4000mを11分00秒で通過した時点で10名以上が集団に残り、激しいトップ争いとなったが、ラスト200mから猛然と追いつけた井上大仁(MHPS)が13分38秒44で自己記録を更新しトップでゴールした。

女子は織田記念陸上で活躍した山ノ内みなみ(京セラ)が好調を継続し、日本人トップの15分23秒96で3位に入った。4位には野上恵子(十八銀行)が入り15分24秒70と自己記録を更新した。

井上、野上はともにジャカルタ2018アジア競技大会のマラソン代表としてスピード強化の成果が見られ本大会での活躍が大いに期待できる結果であった。

ゴールデングランプリ陸上2018大阪 (5月20日) OP男女 3000m

男子は、2018年度の強化目標である3000m 7分45秒を目指し、日本人選手11名とケイタニー(トヨタ紡織)の12名が出場した。秦将吾(大塚製薬)をペースメーカーに1000mは予定通り2分35秒で通過したが2000mはペースダウンし5分21秒(2分46秒)の通過となった。ここから佐藤悠基(日清食品グループ)がペースを上げたが、最後はケイタニーのスピードに屈した。日本人トップには、最後までケイタニーと競り合い7分54秒73と自己記録を更新した服部弾馬(トーエネック)が入った。6名が7分台を記録し5名の選手が自己記録を更新したのは収穫であったが強化目標記録には及ばなかった。

女子も男子同様に今年度の強化目標である3000mに6名の海外選手、5名の日本人選手が出場した。好調が伝えられていた鍋島莉奈(日本郵政グループ)が果敢に海外選手に挑み8分51秒72の日本歴代4位の好記録で4位に入った。また日本人選手全員が8分台で走ったのは大収穫であった。

シンガポールオープン 参加報告

強化委員会女子リレーオリンピック強化スタッフ兼コーディネーター 太田涼（山梨学院大学）

1. はじめに

ワールドチャレンジカテゴリーの女子跳躍から3名（走幅跳、三段跳、走高跳）、男女投てきから3名（男子円盤投2名、女子円盤投1名）、トップ8カテゴリーの男子110mHから2名、女子リレーからは4名（100mと4×100mリレー）の選手が参加した。これにコーチ2名、トレーナー1名が帯同した。出場にあたり、シンガポール陸連から5名の選手と1名のコーチが招待を受けての参加であった。また、女子リレーについては2016年度から助成を受けている工副財団からの助成金を活用しての参加であった。

大会が4月11、12日に実施されたこともあり、日本選手達はシーズン初戦の位置付けで参加している者が多かった。参加人数が12名とコンパクトにまとまっており、競技がない選手は応援に回るなど非常に良い雰囲気の中で試合に臨むことが出来た。

2. 大会概要および現地での環境

大会会場はシンガポールの国立競技場であった。中国・北京にある鳥の巣のような雰囲気の立派なスタジアムであった。開閉式の屋根もあり、大会2日目は暑い太陽をさげざるため、朝から屋根が閉まり、照明を付ける中で競技会が実施された。また、空港からホテルまでが約15分、ホテルから競技場までも約15分で移動することが出来、アクセスがとても良かった。日本との時差は1時間であったことから、身体的負担は少なかったように思う。また、現地はととても暑く、シーズン初戦を考えると日本よりも怪我のリスクは軽減されていたと考えられる。日本の4月はまだ寒い日もあることから、シーズンへの導入の位置付けで考えるとシンガポールオープンへの参加は今後も有効活用出来る大会であると感じた。

また、アジア各国の参加状況は東南アジアの国からの参加が多かった。これらの国々の競技力はそれほど高くないが参加国数だけを見ると日本のグランプリプレミア大会よりも多い状況であった。

3. 結果

大会結果は表の通りであった。6種目で優勝することが出来た。シーズンインの位置付けで臨んだことからすれば、記録的にも順調な仕上がりが、今後の試合への手ごたえを感じる事が出来た選手が多かったと思われる。2019年の世界選手権への出場権獲得のためには9月からワールドランキング制が導入されることへの対応が今後の課題として挙げられるが、今回の福島選手を例にポイントを推定してみると福島選手（100m）の記録は記録ポイント1079（11"57）順位ポイント100（Bカテゴリーの大会で優勝）で合計1179ポイントとなる。この1179ポイントを国内の記録会レベル（一番下のFカテゴリーと想定）で獲得しようとすれば、記録ポイント1164（11"16相当※日本記録）順位ポイント15（Fカテゴリーの大会で優勝）で1179ポイントということになり、今後、アジアのパーミットでポイントを獲得することが2019年世界選手権および2020年東京五輪への出場者数増加への戦略の1つになる可能性もある。

4. 最後に

競技の空き時間を利用し、今年度からシンガポール陸連のGMに就任したRen Kai氏のところに、今大会へ招待頂いた御礼をするために選手2名が英語で挨拶をした。日本のトップアスリートが国際大会に参加し、大会主催者の方と顔見知りになったり、英語で挨拶したりすることは社会的行動として必要なことであると考えられる。



第80回 シンガポールオープン 結果一覧

出場種目	選手名	所属	記録	順位
男子円盤投	米沢茂友樹	オリコ	51m83	2
男子円盤投	湯上 剛輝	トヨタ自動車	55m12	1
男子110mH	野本 周成	早稲田大学	13秒84 (±0)	1
男子110mH	古谷 拓夢	早稲田大学	13秒84 (±0)	3
女子100m	福島 千里	セイコー	11秒57 (±0) 大会新	1
女子100m	市川 華菜	ミズノ	11秒78 (±0)	3
女子100m	前山 美優	新潟アルビレックスRC	11秒79 (±0)	4
女子走幅跳	清水 珠夏	城北信用金庫	5m99 (±0)	3
女子三段跳	宮坂 楓	ニッパツ	12m84 (±0)	2
女子走高跳	仲野 春花	早稲田大学	1m81	1
女子円盤投	辻川美乃利	筑波大学	49m37	1
女子4×100m リレー	福島千里⇒市川華菜⇒齋藤愛美⇒前山美優		44秒31 大会新	1

AIMS理事会・総会報告

専務理事 尾縣 貢 (AIMS理事)

国際マラソン・ディスタンスレース協会 (AIMS = エイムズ) の理事会が、4月19日 (木) ~ 20日 (金) の2日間、モロッコのアガディールで開催され、AIMSの理事として両会議に出席した。

世界へのロードレースの浸透を目的に1982年に設立されたAIMSは、世界の主要レースが加盟する任意団体で、国際陸上競技連盟 (IAAF) の協力団体でもある。IAAFと共同でコース計測の基準を策定し、道路競走の世界記録承認の統一した条件づくりを進めてきた。1990年~2010年には、本連盟の帖佐寛章顧問が会長を務めていた。

AIMSに加盟するためには、2年以上のレース開催実績や、コースがIAAF/AIMS認証を得ていることなどの条件があるが、現在、世界では446、日本では23レースがAIMSの会員となっている。

AIMS理事会は基本的に年2回開催され、AIMS会員レースであるアガディールマラソンが、誘致したことでモロッコでの開催となった。なお本年11月には、エストニアの首都とタリンで、理事会と2年に1回開催の総会が予定されており理事選挙も実施される。

現在の理事会は、スペインのパコ・ボラオ氏以下、副会長2名、専務理事1名、財務担当理事1名、理事5名の計10名で構成されており、会長以外の出身国は、メキシコ、オーストラリア、イギリス、アメリカ、南アフリカ、チリ、チェコ共和国、ハンガリー、そして日本となっている。

このほか、AIMSが発行する機関誌「Distance Running」の編集担当者、マーケティング担当者、アテネにあるAIMS事務局の責任者、そしてAIMSが任命するマラソン・アンバサダーの一人、モロッコの元マラソン選手でアガディールマラソンのレースディレクターのラシド氏も理事会に参加した。

本理事会の議題及び、主要な議論の内容を、以下の通り報告する。

◆議題

1. 前回議事録の承認
2. IAAFとの協力関係
3. IAAF/AIMSコース計測エリア統括責任者の契約文書
4. AIMS法人化について
5. 広報担当からの報告
6. 機関誌及びウェブ担当者からの報告
7. 距離計測など技術面についての動向
8. 加盟レース数の動向
9. 財務及びマーケティング
10. AIMS主催チルドレンレースの実施報告
11. マラソン博物館 (ベルリン) について
12. 総会準備状況報告
13. ガラとシンポジウム準備状況報告

【AIMSブランド魅力】

これまでの理事会の最大の関心事は、加盟レースをいかに増やすかである。加盟数は年々、増加しており、1982年の創設時28レースであったのが、現在446レースを数える

ことが報告された。マーケティング担当者からは、世界の7000レースに対し、AIMSへの加盟を呼びかけるメッセージを発信していることもあわせて報告された。

AIMSに加盟することのメリットとしては、AIMS会員レースに対するランナーからの信頼感が大きい。すなわち加盟条件であるコースのIAAF/AIMS認証、レースの開催実績は、ランナーが次の出場レース選びをする際の重要なポイントとなっている。最近では、マラソンツーリズムという用語を耳にするようになってきているが、海外からの参加者も増やしたいレース主催者にとっては、AIMSブランドは魅力的となっている。

【IAAFとの今後の関係】

他方、今回の理事会では、IAAFとの今後の関係についての議論に多くの時間を割くこととなった。AIMS創設時、IAAFはオリンピックや世界選手権をはじめとした競技スポーツとして陸上競技に重きを置いており、一般ランナーも参加できる大衆マラソンの多くが加盟していたAIMSとのすみ分けができていた。そうした背景のもと、IAAFとAIMSが協力し協議検討を進めた結果、コースの自転車計測による認証制度が確立され、道路競走の世界記録承認の統一した条件の決定という大きな成果も得られた。

ところが、近年の世界規模でのマラソンブームは、IAAFにとっても大きな関心となった。2008年に、IAAFが世界のロードレースを格付けするラベリング制度をスタートさせたことで、ゴールド、シルバー、ブロンズといったIAAFブランドを冠する大衆マラソンが年々増加している。こうした情勢を鑑み、今後のIAAFとの協力関係の在り方について、理事会で議論を継続することとなった。

【AIMS事業と財政基盤】

AIMSの主要な事業には、年4回の機関誌「Distance Running」の発行と、途上国で実施しているチルドレンレースがある。特に機関誌は、IAAFと共同発行という形をとっており、これまでIAAFからも補助金が提供されていたが、この見直しについてIAAFから提案があったという。印刷物ではなくウェブ版にすることも含め、検討が続けられる。また事業継続のために、いかにスポンサーを増やすかについても意見交換がなされた。

【コース計測員の増加に向けて】

このほか理事会では、AIMSがIAAFと共同で基準を策定した道路コース計測に関連し、自転車計測の世界的現状や自転車計測員の動向について報告がなされた。また自転車計測員を統括するためにアジア・オセアニアはじめエリアごとに責任者がいるが、義務と責任を明記した契約書が新たに交わされることも報告された。アジア・オセアニア地区の責任者、AIMS副会長でものデイブ・カンディ氏である。日本には国際資格であるA級とB級の自転車計測員があわせて10名いるが、この数をさらに増やすうえで、エリアの責任者によるIAAFとAIMSへの推薦は必須である。エリア責任者への日本の計測員からの継続的な計測報告書の提出など、普段からは情報交換は重要となる。

国際陸連 (IAAF) 競歩委員会報告

強化委員会 男女競歩オリンピック強化コーチ 今村文男 (IAAF 競歩委員会委員)

第28回世界競歩チーム選手権 (中国・太倉市) が終了した5月5日と翌6日に国際陸上競技連盟 (IAAF) 競歩委員会会議が開催され、IAAF 競歩委員会のメンバーとして参加した。会議では、各報告とともに複数の議題について協議した。

以下に示すのは今次会議の主な議題および協議事項と報告事項である。

日時：2018年5月6日 (日) 14:00～18:00および5月7日 (月) 9:00～13:00

開催地：中国 江蘇省太倉市 フォーポイントバイ シャラトン太倉

主催者：国際陸上競技連盟競歩委員会

議題：開会宣言 (マウリツィオ ダミラノ委員長) / IAAF 概要 / 前回議事録の承認 / IAAF World Athletics Series / オリンピック概要 / 太倉2018 (世界競歩チーム選手権、概要) / ドーハ2019 (世界陸上競技選手権大会、コース、競技日程、参加基準) / ミンスク2020 (世界競歩チーム選手権、得点法) / 東京2020 (オリンピック競技大会、コース、競技日程、参加基準) / Race Walking Survey (競歩種目の現状と将来に関する Web 意見調査) / 調査結果の報告と議論 / 50km 競歩の将来について (男女とも) / テクノロジーについて / ロスオプコンタクト検出電子システム (進行状況) / 今後の競歩種目の定義について (判定テクノロジーを反映したもの) / 2018年 IAAF 競歩チャレンジについて / 今後の振興策について / 国際競歩審判員 (IRWJ) 育成認定システム / 2018年 IRWJ 評価認定 / レベル III 定年制度 / IRWJ の行動様式 / 競歩委員会会議の統制について / 戦略プランの検討報告 / 競歩のマーケティングについて / 競技規則 230 条第 7 項 (c) の文言修正 / 2019 年以降の競歩委員会の将来について / その他 / 次回会議について

【競歩の将来】

東京2020オリンピック以降の競歩種目について、委員会は、より短い距離 (ランニングディスタンス、競歩ディスタンス) の種目を含む、将来の競歩プログラムについて、より多くの時間をかけて議論をした。そして、競歩をより魅力的にして、ファンやステークホルダーから支持を得られるように、東京2020オリンピック以降の競歩種目構成の変更を理事会に提案することになった。その理由は以下

- ・競歩種目の人気を高める必要がある (to make more attractive)
- ・種目の人口を増やす (特にジュニア年代)

* 最終決定前には選手およびコーチからの意見集約を必ず実施する。
* 委員会からは期限を定めた短期間の調査を個人種目の距離について行う。

* ビットレートの運用について、名称を「Penalty Zone (ペナルティゾーン)」に変更し、全ての競技会で使用することに同意し、ルールの変更を検討することになった。

* 委員会として、女子50000m 競歩 (トラック) の最高記録の扱いについて、2018年12月31日時点で、4時間20分以内とすることとした。

以上を委員会案として、作業部会で6月中に取りまとめ、7月開催予定のカウンシル会議に、提案することになった。

【IAAF 競歩委員会主催セミナー報告】

世界競歩チーム選手権開催の前日5月4日 (金) に委員会主催のセミナーを選手、コーチ等を対象に実施した。概要は以下の通りである。

プログラム1：Race Walking Survey 報告

(Race Walking Committee 委員：Tim Berrett)

* ワールドカップ競歩・世界競歩チーム選手権の参加者及び参加国数及び IAAF 競歩チャレンジの競技会数と参加者数の変化に関する報告に合わせ、この2～3月に渡って Web 上で行われた “Race Walking Survey (競歩種目の現状と将来に関する意見調査)” の結果が報告された。

* ワールドカップ競歩・世界競歩チーム選手権への参加状況については参加者・参加国数が減少傾向にあること、IAAF 競歩チャレンジについては競技会数・参加者数ともに減少

傾向にあり、いずれも競歩種目として改革が必要な現状が報告された。

* Survey には全大陸の100カ国1650名が回答した。回答者には競技者、コーチ、役員、代理人、ファン、報道などが含まれていた。また、回答項目は主要競技会などでの競歩種目の種目設定、判定方法への意見、また、他種目との協力のあり方、競技会運営の方法など多岐にわたるものであった。いずれにしても、これまでの競歩種目を評価しつつ、今後は競歩種目を取り巻く環境に合わせて大きな改革が必要であるとしてまとめられた。

プログラム2：Anti-Doping について

(Medical Committee 委員：Stephane Bermon)

* 競歩種目における Anti-Doping の現状と将来について報告が行われた。

プログラム3：Judging & Technology

(Race Walking Committee 委員：Jane Saville)

* 将来的な導入が検討されているロスオプコンタクト検出システムについて報告が行われた。圧電素子センサーを内蔵したインソールを子機として着用し、個々の選手のロスオプコンタクトの発生状況を検出し、そこから選手となる管理システムに送信されレース運用を行うというもので、親機をコントローラーとなる PC 画面とともに紹介された。

* セミナー上ではあくまでも機器の開発状況として紹介されたもので、実際の競技会での運用方法や現行ルールとのすり合わせ、継続性の担保などについては Technical Committee 他での議論に任せられるであろうとして報告された。

* 実際に選手が着用している状況などの動画報告はなく、機器の写真及びロスオプコンタクト時間を検出したコントローラー PC 画面が報告されただけであり、実際の競技会運用には様々な状況でのテストが必要な状況と思われる。

【IRWJ のエバリュエーション (国際競歩審判員試験)】

日時：2018年11月3日 (土)～4日 (日)

場所：ロンドン・クラウンプラザヒースローホテル

現在求められる状況：2019年から2022年までに20試合の主要国際競技会が開催され、4年間でのべ63名の IRWJ が委嘱される。年度ごとでは、2019年9名 (世界選手権)、2020年24名 (U20 世界選手権、世界競歩、オリンピック)、2021年9名 (世界選手権)、2022年21名 (U20 世界選手権、世界競歩、ユースオリンピック)。現在、IRWJ (IAAF レベル) が26名おり、エリア推薦枠の IRWJ (エリアレベル) 15名 (ヨーロッパ5名以外は各エリア2名) とあわせ41名で実施予定。但し、IAAF レベルは、評価の時点で70歳以下、エリアレベルは、60歳以下で2016年までにエリアレベルの資格を得ていることが条件となる。

日程：11月2日 (金) 到着、3日 (土) 評価、4日 (日) セミナー、5日 (月) 出発

言語：英語にて実施 試験委員：委員会にて指名する。試験内容：次の3部門で実施する。口頭、筆記、ビデオ。

以上の情報は、IAAF レベル向けには、既に伝えられ、エリアレベルについては、各エリアの割り当て枠内の氏名とそれ以外の人数を回答するように伝えられることになる。

【IAAF 主要競技会】

2019年と2020年に実施される IAAF 主要競技大会について、実施種目と周回コースの距離は以下の通りである。

ドーハ2019世界陸上：男女20km、ミンスク2020世界競歩男女20km、2020東京オリンピック男女20kmの周回コースの距離は、いずれも1往復1km、ドーハ2019世界陸上：男女50km、ミンスク2020世界競歩男女50km、東京2020オリンピック男子50kmの周回コースの距離が、1往復2kmになることが報告された。

なお、東京2020オリンピックの競歩種目実施日は以下のとおりである。

7月31日 (金) 男子20km 競歩、8月7日 (金) 女子20km 競歩、8月8日 (土) 男子50km 競歩

長野マラソン「日本陸連ランニングクリニック」

普及育成委員会 ランニング普及部 部長 前河洋一

1998年冬季オリンピックのレガシーとして、信濃毎日マラソンをリニューアルして歩み出した「長野マラソン」が第20回の記念大会を迎えた。5時間の制限時間、海外招待を含むエリートから市民ランナーまで幅広いランナー層5000人の参加者でスタートした大会は、参加者枠10000人を超える全国でも有数の人気大会として定着してきた。

日本陸連は、第2回大会からレース前日に一般ランナーを対象としたランニングクリニックを実施し、ランニングの普及と市民ランナー指導に携わってきた。当初は個別相談会としてランナーへのアドバイスや悩みに答える形式であったが、より多くのランナーに参加してもらいランニングの普及につなげる狙いで、現在のスタイルへとクリニックの内容も変化してきた。

今回の第20回記念大会では、日本陸連ランニングクリニックの歴史を振り返りながら、今日のマラソン人気に至る背景や現状にも焦点を当て、社会に貢献できるマラソン文化のより良い発展と定着に向けた取り組みや課題についても検討を加えた。日本陸連としても、市民ランナーへの指導や指導者養成、大会の充実などへの取り組みをスタートさせており、長野モデルを全国に広めようとしている。長野マラソンにおける日本陸連ランニングクリニックは、そのモデルケースとして、大会の発展やランナーの増加と並行しながら、大きな役割を果たしてきた。

講師として、トークショーにはランニングクリニックの立ち上げに尽力された有吉正博先生（関東学連会長）と、元オリンピック代表で長野マラソンでもお馴染みの浅井えり子氏。相談会には日本陸連普及育成委員会ランニング普及部の委員や公認コーチ、スポーツドクターが担当した。レース前日（4月14日）、参加者がランナー受け付けのついでに足を運べるよう、ビッグハットにて以下のプログラムを第一部・第二部ともに午前と午後の2回実施した。

第一部：トークショー（45分）

「マラソン人気と市民ランナーの変遷について」有吉正博
「長野マラソンの魅力とレース直前の過ごし方」浅井えり子

第二部：テーマ別グループ相談会（60分＝30分×2回）

「ランニングフォームと体幹トレーニング」市河麻由美
「マラソンのレース対策と注意点」大島めぐみ
「マラソントレーニングの基本とレベルアップの秘訣」渋谷俊浩
「ランナーの食事と栄養に関するアドバイス」大畑良美
「ランナーの健康と体調管理・内科的トラブル」岡野裕
「ランニング障害の予防と対処法」小嵐正治

大会ホームページを通じて事前に参加申し込みを受け付け、会場のスペースにゆとりがあれば当日飛び入り参加も受け入れたところ、トークショーはランナー受付に来た参加者で溢れ、立ち見席も出るほど賑わった。また、座席に限りがある相談会においても、6つのテーマに参加者が分散して午前は199名、午後は146名の参加があり、合計では事前申し込みの197名を遙かに上回る345名の参加者であった。

長野マラソンは制限時間が5時間に設定され、初心者にとっては完走が厳しい条件となっているが、過去の完走率は86%前後で推移している。そのため参加者層は比較的トレーニングを積んだランナーで占められていると考えられ、それだけにトレーニングやレースに対する疑問や悩みを抱え、指導やアドバイスへの関心が高いと思われる。時代の変化とともにランナーのニーズも変わってくるが、今後も継続して、日本におけるマラソンの発展のため、普及イベントについて検討を進めたい。

なお、このランニングクリニックは大会事務局をはじめ長野県陸上競技協会の先生方に多大なるご尽力をいただき、運営へのご協力と併せて感謝申し上げます。さらには、担当いただいた講師の皆様や大会関係各位にも重ねてお礼を申し上げます。



日本陸連栄養士会 第5回カンファレンス2018 開催報告

日本陸連 食育プロジェクトメンバー 浜野 純

2018年4月22日(日)の午前中に、味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて「日本陸連栄養士会 第5回カンファレンス」が開催された。これまで栄養士会では、勉強会を開催し情報共有を重ねており、今回は「リオ五輪でのサポートの実際」について報告がなされ、今後の連携体制について議論がされた。第5回となる本会では、「大学生アスリートを取り巻く環境」と、「女性アスリートの月経周期に伴う運動時生体反応の変化」について報告された。なお、参加者は日本陸連食育プロジェクトメンバー、都道府県陸協の管理栄養士、実業団および大学陸上部の管理栄養士、計27名であった。

報告1: 「大学生アスリートを取り巻く食環境～帝京大学 栄養サポートの場合～」

帝京大学スポーツ医科学センター

(日本陸連 食育プロジェクトメンバー) 葛西真弓氏

大学内の「選手を医科学的にサポートする体制」の中で、葛西氏は管理栄養士の立場で、選手と向き合い栄養管理を実践されている。その中の活動として、今回は2つのテーマについて報告された。

①大学選手の食環境についての現状: 大学陸上部へアンケート調査を実施した結果、「部に管理栄養士が常勤で所属している」と答えた大学は非常に少なく、食事や栄養のサポートを受けている選手が少ない現状が報告された。今後、大学生アスリート育成のためには、大学側への栄養や食事サポートの重要性を示し、理解を求める必要性が示された。

②帝京大学での部活動へのサポート活動: 実際の選手に対してのサポート体制として、帝京大学では「トータルサポートシステム」の仕組みが導入されている。これは、「メディカル」と「サイエンス」と「フィジカル」といった複数分野の専門家が連携・協力し、アスリートを多角的にサポートする仕組みである。このトータルサポートシステムでは、例として血液検査の異常値があった場合、ドクター、管理栄養士、トレーナーに即時に情報が共有される体制が構築されている。したがって、選手の問題点に対して迅速かつ確な対応が取られる。管理栄養士はフィジカル部門に所属しており、複数名の管理栄養士が各部活動に対して栄養管理を行っている。この栄養グループの活動理念を「一勝から一生の食サポート」とし、勝利のためだけでなく、その選手が食を自ら考え自立し、その後の生涯も健康で過ごすことができるように考慮した上での、食事・栄養サポートがなされていることが報告された。

報告2: 「女性アスリートの月経周期に伴う運動時生体反応の変化」

日本体育大学 児童スポーツ教育学部
運動生理学研究室 須永 美歌子氏

日本陸連 科学委員でもある須永氏から、月経周期に伴う運動時の生体反応についての報告がされた。女性アスリートの多くが月経周期によるコンディションの変化を感じている。調査によると選手が自覚するコンディションが最も悪い時期は「月経中」であり次に「月経前」である。これは女性ホルモンと大きく関係しており、男性に比べて月単位でホルモンがダイナミックに変動する女性は、コンディションを考えるうえで月経周期を考慮する必要がある。今回は月経周期について排卵前を「卵胞期」、排卵後を「黄体期」と分けて報告がされた。須永氏の研究では、持久性運動(60分間)を行うと、運動前から運動後にかけて、糖原性アミノ酸(アラニン、グルタミン、スレオニンなど)血中濃度が、卵胞期に比べ、黄体期に低い値を示した。糖原性アミノ酸は、TCA回路を経てグルコースの合成に利用されるアミノ酸であり、長時間の運動時エネルギー供給に関与する。今回の結果は月経周期が運動中のエネルギー基質利用に影響し、疲労感との関連性を示す可能性も考えられることが報告された。その他に呼吸器等で卵胞期と黄体期での生体内反応の違いについてわかりやすく示された。

また女性アスリートの月経周期に伴う体重の変化については、調査の結果で、体重は排卵期に低下し、黄体期に増加する選手が多い。その一方で体脂肪量はあまり変化がないことが報告された。したがって体重の変化は、性ホルモンに伴う水分量増加によるものであることが多いと推察される。ただし、月経周期の影響については個人差が大きく、さらに個人内変動も大きいので、本人や指導者が月経に伴うコンディションの変化をまずは観察、把握することが重要である。その上で体重管理を行うことも必要があることが報告された。また今後、月経に伴う生体の反応を考慮したうえで、コンディションをコントロールするために、食事内容や栄養管理についても考えていく必要性が示された。

今回のカンファレンスは、組織的に、そして科学的な根拠に基づいた栄養サポートの重要性を考える機会となった。

日本陸連栄養セミナー2018開催報告

食育プロジェクトメンバー 鈴木いづみ

2018年4月22日(日)味の素ナショナルトレーニングセンターにおいて「日本陸連栄養セミナー2018」を開催した。参加者は指導者、陸上競技選手、管理栄養士などおよそ120名であった。第3回目を迎える今回は「女性アスリートのエネルギー不足を考える」をテーマに教育講演、トークショー、パネルディスカッションの3部構成で行われた。

会の始めに、医事委員会委員長の山澤文裕先生より、①エネルギー不足は女性アスリートのみならずアスリート全体の問題であること、②エネルギー不足のないアスリートを作ることが重要とのご挨拶をいただいた。

教育講演は医事委員会の難波聡先生より「女性アスリートの身体を守るには～エネルギー不足について考える～」というテーマでお話頂いた。講演では、①女性アスリートの無月経はそれ自身が悪いというより、続発する骨密度の低下、骨粗鬆症の発症、選手生命の短縮化が問題であること、②陸上中長距離選手は無月経と疲労骨折の頻度が高い種目のひとつであり、BMI17.5未満でハイリスクであること、③無月経の治療については、ホルモン補充療法を行っても骨密度増加効果は不確実で、むしろ体重の増減の影響度が高いため、体重そのものを増やす方が改善に有用であること、④そのため、運動量に応じた適切なエネルギー摂取を行い、適切な体重管理を行うことが重要であること、⑤とりわけ、中学生年代で健全に骨密度が増加しないと手遅れになる可能性があり、思春期の適切な体重増加が重要であること等が教示された。終わりに、女性アスリートの三主徴を予防するためには、①早期発見、②指標(体重、エネルギー摂取量、血中ホルモン濃度、骨密度)の数値化、③早期介入の3点が重要であり、コーチ、ドクター、トレーナー、栄養士、保護者の連携が不可欠であるとまとめられた。

トークショーは女子マラソン元日本代表選手の弘山晴美氏、ワコール女子陸上競技部管理栄養士の澤野千春氏による対談形式で行われた。弘山氏のコメントは以下の通りである。「中学、高校、大学時代と好き嫌いなくしっかり食べ『ぽっちゃり』していた。しかし筋力があつたためスピードはあつた。大学生以降は自炊しており、普段の献立は、ごはん、汁物、主菜、野菜で、主菜は肉・魚を交互にし、肉は鶏豚牛が重ならないように気を付けた。指導者から体重管理を厳しく指導されることもなく、食事制限を指示されたことは一度もなかったが、自分なりに身体の管理はしていた。具体的には、オフシーズンに体重を少し増やし体に自然な負荷をかけて走り、夏の走り込み期は特にしっかり食べ、大きな試合(日本選手権など)に向けては、1.5～2ヶ月間くらいかけて1.5～2.0kgくらい減量した。減量では、食事はしっかりとって嗜好飲料と間食をやめるようにし筋力維持に努めた。実業団時代は疲労骨折はなく月経も正常であった。40歳まで現役を続けられた要因は、中学、高校時代にしっかりとした体づくりの土台があつたからであると思う。」

パネルディスカッションは、難波聡先生を座長に、医事委員会の塚原由佳先生、青山学院大学陸上部短距離総監督の安井年文先生、医事委員会の田口素子先生より「女性アスリートのエネルギー不足について考える」をテーマにそれぞれご発表頂き、総合討論が行われた。

塚原由佳先生からは、試合帯同時の経験をもとに、女子選手の特徴、トップ選手の無月経の状況、月経・食事に関する

選手からの相談内容、医事委員会における女性アスリートサポートの取組み等について、スポーツドクターの立場から詳細に渡ってお話いただいた。

安井年文先生からは指導者の立場からお話頂いた。選手の身体的なコンディションの把握は、健康であること、ケガをしていないこと、太っていないこと(身長-110または身長-112を基準に)、食欲があること、睡眠不足ではないことの5項目で評価しているとのことであった。問題があつた場合は、適切な治療、およびスタッフによる面談を通じて解決を図っているが、社会的・組織的な支援があることよりよいとのお話があつた。

田口素子先生からは公認スポーツ栄養士の立場でお話頂いた。スポーツ庁委託事業「女性アスリートの育成・支援プロジェクト」における調査結果から、女性アスリートは、①朝食量が少ない、②主食(穀類)が少ない、③野菜(特に緑黄色野菜)不足、④牛乳・乳製品不足といった問題があることが明示された。とりわけ、過度な主食の制限は三主徴のリスクを高めるとの指摘があつた。

総合討論では、会場から具体的な質問が複数上がり活発な意見交換が行われた。①選手を支援するスタッフ・保護者の連携や、②選手の状態のアセスメントやモニタリング、③早期発見・早期対応などが重要とのコメントが出た。

セミナーの結びに、難波聡先生より「アスリートのエネルギー不足予防10か条～バランスよい食事も練習のうち～」が宣言された。この10か条はアスリートの健康を支えることを目的とした日本陸連医事委員会からのメッセージで、貧血対処7か条(2016年)、疲労骨折予防10か条(2017年)に続く第3番目の発信である。内容は以下の通りである。

アスリートのエネルギー不足予防10か条 ～バランスよい食事も練習のうち～

1. 大事にしよう、練習メニューも食事メニューも
2. 毎食に主食、おかずと乳製品
3. しっかり食べて、こころとからだを壊さない
4. サプリメント、食事のかわりになりません
5. 無理な減量、体調・記録に逆効果
6. 気にしない、“ちょっと太った?”の一言を
7. エネルギー不足は月経異常や疲労骨折を引き起こす
8. 女子だけじゃなく男子も注意、エネルギー摂取の重要性
9. 食事の乱れ、まわりが気づいてサポートを
10. ドクターや栄養士にいつでも相談、ささいなことでも

医事委員会では、今後、日本陸連の関連媒体やホームページ等にこの10か条を掲載し、エネルギー不足予防の重要性を普及していきたいと考えている。さまざまな情報、活発な意見交換、多様な質問により盛会となった日本陸連栄養セミナー2018は、普及育成委員会の大畑好美氏によるご挨拶をもって閉会した。

なお、本セミナーは食育プロジェクトの一環として開催された。今後も、指導者、ドクター、トレーナー、栄養士、保護者等、選手を支援する多くの方々へ有益な情報を提供できるよう食育プロジェクトの活動を進めていきたい。

国際陸連ヘルス&サイエンスコミッション会議参加報告

日本陸連理事・医事委員長 山澤文裕

2018年5月18、19日の両日に、国際陸連（IAAF）本部のあるモナコにおいてヘルス&サイエンス（H&S）コミッション会議が開かれた。もともと、医事アンチ・ドーピングコミッションとして活動していたが、IAAF前会長が中心に絡んだ様々な汚職事件や医事アンチ・ドーピング部前部長のロシア問題の隠蔽や収賄などを受けて、IAAFは医事アンチ・ドーピング部を解体し、ドーピング問題、年齢詐称、加盟団体の諸問題などを取り扱う組織をアスレティックス インテグリティ ユニット（AIU）としてIAAF本部から独立させて設置した。医事部門を中心に扱う部門はH&S部としてIAAF本部に新設され、それに伴う外部委員より構成される委員会をH&Sコミッションとした。今回は2017年2月に続き、H&Sコミッション会議として2回目の会議である。

今回は会議冒頭にCEOによる挨拶とこれからのIAAFの方針について説明があったが、CEOの突然の辞任のため本部からの挨拶は無く、またトラックシーズンが始まっているため参加できない委員もあり、少し寂しく感じられた。しかしながら、H&S部バーモン部長により1年間の活動報告があり、エリートアスリートのみでなく、一般人の健康増進のために様々な事業を実施し、さらに活動範囲が広がること、新しく医事主任としてアグミ医師が着任したことが報告された。

大会参加前メディカルチェック（PPME）についての議題が最初にあった。2017年に開催されたナイロビU18とロンドン世界陸上のアンケート調査で、U18で64%、エリートで55%がこれまで一度の心臓検診をうけていないことが報告された。運動中の心臓突然死を予防するため、世界選手権のすべての大会に出場する18歳以上のアスリートは2年ごとに心電図検査を受けることを競技規則とするようにカウンシルに提言することとした。地域、国によって状況が異なるが、2021年にはすべての陸連が実施することとした。IAAFはアスリートが心電図検査を受けて、世界選手権に参加できるという証明を各国陸連からもらうこととする。

高アンドロゲン（HA）女性アスリートに関するIAAFのプロトコルは、国際スポーツ仲裁裁判所（CAS）よりIAAFの説明には科学的根拠が少ないという理由で実施が中断させられた。その後、データを集積し、より科学的に詳細に検討したところ、400m～1マイルのトラック種目のみに限って、HA女性アスリートの競技力の優位性が認められた。HA女性アスリートのなかで、特定の疾患があり、かつ特別な状況下にあるとIAAFが認定した女性アスリートに限っては薬物治療を行い、上記種目に出場を予定している国際大会の6カ月前から血中テストステロン濃度を5nmol/L以下に継続的に持続させた証拠の提出がないと、その国際大会に出場させないとしたルールを策定した。国内大会に関してはHA女性アスリートに対しては何の制限もないため、これまでのプロトコルよりはアスリート、種目、大会の対象範囲が狭められた。しかし、HAが疑わしいアスリートは、自ら、もしくは各国陸連がIAAF医事主任に伝えることとなる。この規則は2018年11月より実施されるため、啓発が必要である。

スポーツにおける虐待やハラスメントが世界中で報告されているが、IAAFよりコーチやドクターに対する声明が未だ出されていない。各国陸連に対して、質問調査を行い、各国陸連のビジョンや計画に虐待やハラスメント防止についての

ポリシーを導入させ、アスレティックスの健全な発展に寄与することを目的としている。回答数が35陸連と低く、各国陸連のこの問題についての関心の低さが如実に表れているが、16陸連がすでにポリシーをもっていた。今後は、アスリートに対して虐待の有無、内容などの調査を通じて、アスリート委員会と共同でIAAFポリシーを策定する予定である。

TUEに関して、リオ五輪で参加した全11,303選手のうち約1%強の143選手しかTUEを申請付与されておらず、同様にメダリストも1%しかTUEを申請していなかった。IAAFへのTUE申請は五輪年に多くなっているが、37件とわずかである。興奮薬申請はADHD治療薬で、ほとんどアメリカとスカンジナビア諸国からである。ADHDに対する薬物を含めアメリカではナースが薬を処方し、TUE書類への署名を行うことがあるが、これについてはIAAFは医師以外のものによる署名は認めないとした。TUE制度はスポーツにおけるハイレベルな医療をめざしているため、記載された診断には異議を唱えないが、その診断根拠をアスリートおよび主治医側はきちんと提出する必要があること、TUEが付与された状況下で競技会に出場して疾患の状況が悪化としても、TUE委員会は大会出場を強制しておらず、アスリートの自発的な行為として出場しているため、疾患悪化の際の責任は主治医側にあると判断することが共通認識となった。

アスレティックスは時間、距離、高さを競う個人競技であるため、数学的にさまざまな検計が可能である。アスリートのパフォーマンスを長期間にわたり観察し、次の大会のパフォーマンスを予測するアスリート パフォーマンス パスポート（APP）という手法をIAAFは外部機関と共同で開発中である。アスリートの生物学的指標を長期間にわたり観察するアスリート バイオロジカル パスポート（ABP）と同様の概念で、想定範囲を大きく逸脱して良好な結果を出した場合、ドーピングを疑うことも可能である。スポーツにおける公正さを阻害するドーピングを撲滅するために、様々な手法の導入は好ましいことである。

エネルギードリンクの危険性について検討した。30%以上の若者がエネルギードリンクを飲んでいる。特に、カフェイン入りエネルギードリンクは、心拍量の増大、血圧の上昇など心臓への悪影響があり、さらにガラナ、ヨヒンビン、テオフィリンなどの興奮薬も入っていることが知られている。ドーピング目的でアスリートの14～39%の使用があるとの報告もあるなど問題が大きいことが指摘された。日本陸連でもカフェイン乱用について検討しており、エネルギードリンクを大会のスポンサーとして使うことは慎重であるべきである。

マラソンの医療体制、わが国最大の東京マラソンの心肺停止の実態、マラソン大会におけるAEDの必要数について筆者が講演した。特にAED台数については、IAAFはガイドラインを出していないため、わが国の救命率の非常に高いデータをもとに、参加者1,000人当たり2台は最低数であることを報告した。またマラソン大会においてWBGTやAir qualityなどの情報が必要で、リスクマネジメントの一環として、暑さ、寒さ、他地域を含む大地震、火事、落雷など様々な要因を考える必要があることを指摘した。

検討した事項が他にもあるが、紙面で報告できない部分も多々あることをご理解いただきたく思います。

2018数字で見る陸上競技 Vol.1 都道府県公認競技会数

事務局

今号より、昨年度に引き続き、シリーズ「数字で見る陸上競技」の連載を開始します。

Vol.1では、2018年5月30日現在の都道府県陸上競技協会公認競技会数を掲載します。

NO	陸協名	公認競技会数
1	北海道	213
2	青森	76
3	岩手	54
4	宮城	50
5	秋田	76
6	山形	132
7	福島	83
8	茨城	71
9	栃木	46
10	群馬	102
11	埼玉	79
12	千葉	91
13	東京	181
14	神奈川	155
15	山梨	57
16	新潟	138
17	富山	45
18	石川	102
19	福井	36
20	長野	119
21	静岡	92
22	愛知	132
23	岐阜	69
24	三重	72
25	滋賀	46
26	京都	97
27	大阪	207
28	兵庫	267
29	奈良	64
30	和歌山	73
31	鳥取	52
32	島根	94
33	岡山	76
34	広島	157
35	山口	91
36	徳島	50
37	香川	84
38	愛媛	61
39	高知	66
40	福岡	83
41	佐賀	36
42	長崎	39
43	熊本	39
44	大分	43
45	宮崎	73
46	鹿児島	41
47	沖縄	36
合計		4146

2018年度A級B級自転車計測員会議 報告

施設用器具委員会

日時 2018年5月3日(木)、4日(金)
場所 日本陸連事務局(小田急第一生命ビル17階)会議室
出席者 施設用器具委員会委員長 高木良郎
副委員長 高沼正利 福島信久
A級B級自転車計測員7名
日本陸上競技連盟事務局 関 幸生 井上博友
畔蒜洋平

今年度から施設用器具委員会では、自転車計測に関わる課題や今後の研修のあり方について検討していくためにA級B級の自転車計測員による会議を行うことにした。全国からA級B級計測員が福島副委員長を含め8名集まった。以下はその2日間の会議の概要である。

【第1日】 司会 莉込幹事

1. 自転車計測の現状と課題

施設用器具委員会副委員長 福島信久

2. ロードレースランニングコミッション(RRC)について

日本陸連事務局 新規事業推進室 畔蒜洋平

JAAFビジョンについての説明。市民マラソン拡大への対応。アスレチックファミリーを増やしていきたい。

3. 自転車計測にかかわる協議および確認事項

(1) 距離の決定について

計測した結果の当該コースの距離の決定数値について

- 距離の決定は、3人のうち最短で計測した値を採用することを原則とする。ただし、3人の計測した数値に大きな開きがあった場合、あるいは継続して計測しているコースで、これまでと大きく異なる数値となった場合は、計測リーダーが判断し、その理由を報告書に記載する。
※6月以降の検定より実施

決定した数値からの距離の修正について

- 新規のコースでは、採用した値となるよう、各ポイントを設定する。
- 継続検定を行ったコースで、前回の数値と比較し、おおよそマラソンで+5m以下、ハーフマラソンで+3m以下、10km以下のコースで+1m以下であった場合は、距離の修正は行わない。(5kmごとのポイントについては、おおよそ+1m以内)
- 大会当日に計測を行い、距離が-0.1%であった場合、当日のレースは公認とし、その次の大会には距離を修正する。
※6月以降の検定より実施

(2) 一部変更について

- 一部変更が認められるのは、全体の1/3の変更までとする。
- IAAF認証コースの一部変更でワイヤー計測が認められる条件は変更し計測する距離：1km以内
計測者：AまたはB計測員を含む報告書および変更したことが明記された図の確認

(3) 報告書について

- 一つのコースで、複数の距離のコースを有する場合の報告書について
・実測調査報告書
P1 3. 競走(歩)路
イ~ホの項目を追加して記載する
・IAAF報告書
No.1-1、No.1-2のようにシートを追加して記載する。
- 報告書は、C級計測員も作成し、計測リーダーにデータで提出する。計測リーダーは、その報告書を確認し、福

島副委員長にデータで送付する。

- ポイント図等申請者が作成し後日送付する書類は、できるだけ速やかに、地元計測員・計測リーダー・日本陸連事務局へデータを送付する。

※2月の自転車計測員会議で周知し、3月の計測から適用する。

(4) 委嘱について

委嘱は、日本陸上競技連盟施設用器具委員会が決定する。
IAAF認証コース：3名のうち2名はAB以上
国内公認コース：3名のうち1名はB以上

(5) 旅費について

意見を出し、検討を依頼

- 検定員、技術役員の区分でなく、A、B、Cの区分の日常、作業手当について検討してほしい。
- 自動車を利用した場合の交通費支給基準を検討してほしい。
- 自転車輸送費や自転車借損料について、申請者と派遣者による協議により、申請者が負担することができるよう検討を依頼する。

4. 自転車計測員の認証について(その1)

(1) B級・A級への昇格について

- 関部長より
計測チームで先頭を走った経験・報告書の内容の2点が昇格に大きく影響するという説明から
○A級B級の計測員は、計測チームとして一緒に計測したC級の計測員から提出された報告書について確認する。
○候補となる計測員には先頭を走る機会を設け、計測技術について把握する。
○候補者を施設用器具委員会より、IAAFに推薦する。

【第2日】 司会 莉込幹事

5. 自転車計測員の認証について(その2)

(1) 新C級の講習の認定に関する研修について

- 今年度新C級取得者がいる場合には、これまでと同様の研修で認定できるようIAAFへの確認を関部長に依頼する。
- 今後については、日本陸連としての構想を踏まえつつ、引き続き検討及び確認を行っていく。

6. 2018年度の自転車計測員会議の内容について

- 講義は必要最小限とする。
- 報告書作成演習
- 自転車の技術向上研修を主体とした会議とする。
会議の詳細については、会議会場が決定したのち検討する。

7. 日本陸連の大会派遣について

日本陸連事務局 事業課 井上 博友
代表選考競技会やラベリング大会にA級B級自転車計測員を派遣しています。

8. その他意見交換

- 今後の展望・その他
・東京マラソンを中心に考えられては地方の歴史ある大会などがつぶれかねない現状ではないか?
距離別公認の有無を確認する。

追加を希望する案件

- ①公認コースと公認大会の関係
競技場付設と市民マラソンの違いについて
- ②AIMS会員について
登録の方法、メリット、必要書類、連絡先、日本における窓口等
- ③ゴールド・シルバー・ブロンズ大会の違いについて

9. 閉会の挨拶 施設用器具委員会副委員長 高沼正利

大会観戦ガイド

2018.5.31 時点

第102回日本陸上競技選手権大会 兼ジャカルタ2018アジア競技大会 日本代表選手選考競技会

女子：200m 決勝/800m 決勝/5000m 決勝/100mH 決勝/400mH 決勝/円盤投決勝

▼期日：2018年6月22日(金)～6月24日(日)

▼場所：山口県山口市維新公園4丁目1-1
維新百年記念公園陸上競技場
(維新みらいふスタジアム)

▼アクセス：

JR：山口線大歳駅から約12分
JR：山口線矢原駅から約16分
バス：防長バス「陸上競技場前」からすぐ。
※駐車場には限りがございます。
極力、公共の交通機関をご利用ください。

▼競技実施日・競技時間

*エントリー数により予選・準決勝はなくなる場合があるが、決勝実施日に変更はない。

[第1日目 6月22日(金)]

14時00分開始予定～19時40分終了予定
男子：100m 予選・準決勝/400m 予選/800m 予選/1500m 予選/10000m 決勝/400mH 予選/ハンマー投決勝
女子：100m 予選/400m 予選/1500m 予選/10000m 決勝/走高跳決勝/走幅跳決勝/棒高跳決勝/ハンマー投決勝

[第2日目 6月23日(土)]

14時30分開始予定～20時40分終了予定
男子：100m 決勝/200m 予選/400m 決勝/800m 決勝/1500m 決勝/110mH 予選・準決勝/400mH 決勝/走幅跳決勝/棒高跳決勝/やり投決勝
女子：100m 決勝/200m 予選/400m 決勝/800m 予選/1500m 決勝/100mH 予選・準決勝/400mH 予選/3000m 障害物決勝/三段跳決勝/砲丸投決勝/やり投決勝

[第3日目 6月24日(日)]

13時30分開始予定～18時00分終了予定
男子：200m 決勝/5000m 決勝/110mH 決勝/3000m 障害物決勝/走高跳決勝/三段跳決勝/砲丸投決勝/円盤投決勝

▼テレビ放送予定

第1日 6月22日(金)
18:00～19:50 (NHK BS1)
第2日 6月23日(土)
19:00～19:30 (NHK BS1)
19:30～20:45 (NHK 総合テレビ)
第3日 6月24日(日)
16:00～18:00 (NHK 総合テレビ)

▼チケット情報はこちら

<https://www.jaaf.or.jp/jch/102/ticket/>

▼問合せ先

日本陸上競技連盟事務局
TEL:03-5321-6580 FAX:03-5321-6591
(土・日祝日を除く10:00～18:00)
※大会の詳細は日本陸上競技連盟WEBサイト内、特設ページ<https://www.jaaf.or.jp/jch/102/>で随時アップします。

第102回
日本陸上競技選手権大会
JAAF Athletics Championships
兼 ジャカルタ2018アジア競技大会日本代表選手選考競技会
YAMAGUCHI 2018
2018.6.22-24
会場 維新みらいふスタジアム (山口県)
山崎製パンは第102回日本陸上競技選手権大会を応援しています。



JAAF HOKKAIDO 一般財団法人北海道陸上競技協会

〒003-0626 札幌市白石区本通5丁目南4番11号
KJビル3号棟2階205
TEL.011-598-7407 FAX.011-598-7408
<http://hokkaido-rikkyo.jp/>

北海道からオリンピックへ。

今年は北海道で開催される大会が非常に重要な年になります。

7月8日(日)に第31回南部忠平記念陸上競技大会兼第5回日中韓3カ国交流陸上競技大会(札幌市:厚別公園)が開催されます。今年大会は日本グランプリシリーズ9大会のひとつに指定され、多くのトップ選手がポイント獲得に向けて熱戦を繰り広げる重要な大会に位置付けられています。大会当日は北海道の小中学生の種目も実施されます。この『南部陸上』は北京オリンピックの4×100mRにおいて銅メダルを獲得した高平慎士さんをはじめ数多くのトップ選手が小中学校時代から出場した歴史ある大会でもあります。

また8月26日(日)には2018北海道マラソン(札幌市:大通公園発着)が開催されます。本大会は2020東京オリンピックに向けたMGCシリーズ2018-2019の1レースであり、男女共にMGCの対象選手となるのは北海道マラソンだけであり、選手がMGC出場権を獲得できるよう、より良いレース環境を提供すべく努力していく所存です。

JAAF AOMORI 一般財団法人青森陸上競技協会

〒038-0021 青森市安田字近野234-7
青森総合運動公園陸上競技場内
TEL.0173-34-7537 FAX.0173-34-7537
<http://www.jomon.ne.jp/arikkyo/>

今年は雪解けも例年より早く進み、計画された新年度の競技会も順調に開催しております。昨年度は単年度決算ではマイナス決算でありましたが前年度までの繰り越しでカバーできました。登録数も中学生の登録は顕著に減少しており事業費の減収が予想されております。このことから今後の財政に大きく影響が出てくるものと懸念しております。今後経費節減に努めマイナス決算にならないよう努力する所存です。

年度最初の競技会であります青森県春季陸上競技選手権大会は、強い風雨で開会式が実施できず開始式に対応しました。競技は1日目から寒さと時折強い雨、そして強風にたたかれ気温は14度前後で朝から大変寒い中での競技会でした。競技会としては悪い条件の中で行われた高校男子ハンマー投げで種市裕紀君(弘前実業高校3年)が60m越えの県高校新記録を出すなど最初の競技会としては幸先の良いスタートとなりました。種市君にはインターハイ優勝を目指して頑張ってくれるものと確信しております。

これから予定されている競技会は、6月24日 日清カップ全国小学生青森県予選会(青森市)・6月30日～7月1日全日本通信陸上青森県大会(青森市)・7月6日～8日国体選手選考会兼東北総体県予選会(むつ市)・7月15日～16日青森県中総体(青森市)・7月29日には東北マスターズ陸上競技大会(青森市)が予定されております。

各大会とも天候に恵まれ好条件の元での競技会であってほしいと願っております。

(文責:理事長 安田信昭)

JAAF IWATE 一般財団法人岩手陸上競技協会

〒020-0822 盛岡市茶畑2-8-27
TEL.019-621-8460 FAX.019-656-9006
<http://long-distance.jp/iwate/>

第50回岩手県ロードレース花巻大会(4月1日)、第22回みちのく春季陸上開大会(4月7日～8日)を皮切りに、平成30年度のシーズンが幕を開け、早速うれしいニュースが飛び込んで参りました。第1回国土館大学競技会において、一般男子砲丸投に出場した佐藤征平選手(高田高校→国土館大学→国土館クラブ)が、18m06の好記録で優勝し岩手県新記録を樹立しました。今後の競技会でもさらなる活躍が期待されるそうです。

また、5月6日中国・太倉で開催された第28回世界競歩チーム選手権大会では、日本代表の一員(男子シニア20kmW)として出場したリオデジャネイロオリンピック、ロンドン世界選手権代表の高橋英輝選手(花巻北高校→岩手大学→富士通)が、世界の強豪を相手に見事優勝を飾りました。その他にも注目選手として男子円盤投の米沢茂友樹選手(福岡高校→東海大学→東海大学大学院→オリコ)、女子競歩の熊谷菜美選手(盛岡第一高校→国土館大学)、男子競歩の高橋和生選手(花巻北高校→早稲田大学)、女子長距離の芦麻生選手(盛岡女子高校→日本体育大学→丸電工)、男子110mHの石川周平選手(花巻北高校→筑波大学→筑波大学大学院)、女子100mHの佐々木天選手(盛岡第一高校→筑波大学)、女子短距離の藤沢沙也加選手(岩手女子高校→岩手大学→セレスポ)、川村知巳選手(盛岡第一高校→慶應義塾大学)、山田未来選手(盛岡誠桜→日本体育大学)、男子やり投の長沼元選手(高田高校→国土館大学)等が挙げられ、今シーズンの活躍もおおいに楽しみであります。今後も本協会強化スタッフを往々に強固な指導体制を構築していきたいと思っております。

大会関係では今年度、本県において、第73回東北高等学校総合体育大会(6月14日～17日:北上総合運動公園北上陸上競技場)、第39回東北中学校陸上競技大会(8月7日～9日:北上総合運動公園北上陸上競技場)、第54回東北高等学校・第29回東北高等学校女子駅伝競走大会(11月8日:一関市)が開催予定であり、ベテラン競技役員(審判員)を中心に、その卓越した審判技術をともに、若手審判員とともに緊張感をもって大会運営にあたりたいと思っております。あわせて、関係各位との協力を密にし、大会の成功に向け全力で取り組んで参ります。

加盟団体の連携強化をさらに図るとともに、適正な会計処理と円滑な事業運営を展開して参りたいと思っております。

さらに今年度は本協会にとって、創立90周年を迎える節目の年となります。総務部を中心に企画を進めており、今後、事業実施の細部について検討をし、90年という歴史を振り返りながら、さらなる発展を目指していきたいと思っております。

(文責:理事長 山崎孝一)

JAAF MIYAGI 一般財団法人宮城陸上競技協会

〒981-0122 宮城郡利府町菅谷字籠40-1 宮城県総合運動公園内
TEL.022-767-2194 FAX.022-767-2194
<http://jaaf-miyagi.com/>

第28回仙台国際ハーフマラソン大会が5月13日風薫る新緑の中で開かれ、13,228人の国内外ランナーが、杜の都を駆け抜けました。メインのハーフマラソンコースは日本陸連公認コースで、弘進ゴムアスリートパーク仙台(仙台市陸上競技場)南側道路をスタートし、同競技場にゴールするコースです。

大会を盛り上げたのは、4月のボストン・マラソン優勝者の川内優輝(埼玉県庁)選手更に、名古屋ウィメンズマラソン第3位の関根花観(日本郵政G)選手でした。今回初めて導入された特別枠「新緑のプリンセスランナー」で練習や伴走のサポート受けられた計31人が走り26人が完走し、達成感、満足感で大好評。

今回のゲストランナーは、「市民マラソンの星」谷川真理さん。Qちゃんこと高橋尚子さんは、7回目の参加で、スペシャルアンバサダーとしてゴール付近で選手を激励し、又、ランナーとハイタッチで大会を盛りあげてくれました。

男子は松本稜(トヨタ自動車)選手が1時間3分5秒で初優勝、女子は実業団招待選手の阿部有香里(しまむら)選手が1時間12分16秒で初優勝でした。

今後は、「東北・みやぎ復興マラソン2018」、「松島ハーフマラソン」、「杜の都 全国大学対校女子駅伝」、「クイズ駅伝 全日本実業団対抗女子駅伝」が開催されます。

(文責:理事長 大泉一雄)

事務局からのお知らせ

◆◆6月22日より山口にて開催！第102回日本陸上競技選手権大会をスタジアムで！◆◆



今夏開催のジャカルタ2018アジア競技大会の日本代表選手選考競技会を兼ねて開催する、第102回日本陸上競技選手権大会。今年の舞台は、山口県山口市、維新みらいふスタジアム！選手達の熱戦をぜひ、競技場でご声援をお願い致します。

大会特設サイトでは、最新情報を随時更新中です！エントリーリストから競技日程、プロモーションビデオなど、大会を楽しむことができるコンテンツが満載です。

第102回日本陸上競技選手権大会特設サイト

<https://www.jaaf.or.jp/jch/102/>

◆◆陸上競技ルールブック2018年度版を、4月より全国の書店、ネット書店で販売開始しました。◆◆

陸上競技関係者や愛好家のための2018年度版ルールブックの発売を開始しました。修改正のあった国際及び日本国内陸上競技ルールを反映し、すべてのルールのほか競技場の仕様、全国の公認陸上競技場一覧などを掲載しているルールブック。

お近くの書店にない場合は、電話またはホームページからご購入いただけます。
お電話でのご注文の場合：0120-911-410（ベースボール・マガジン社 受注センター）
※受付時間 月曜日～金曜日 10：00～12：00、13：00～16：00（祝祭日を除く）
ホームページからご注文の場合：ベースボール・マガジン社のウェブサイトへ。
<http://bookcart.sportsclick.jp>



陸連時報編集委員

◇編集委員

横川 浩（陸連会長）
友永 義治（陸連副会長）
八木 雅夫（陸連副会長）
尾縣 貢（陸連専務理事）
麻場 一徳（陸連強化委員長）
風間 明（陸連事務局長）
高橋 克実（陸上競技マガジン編集長）

◇時報編集室責任者

大嶋 康弘
◇時報編集担当
繁田 進
石塚 浩
木越 清信
宮田 宏
廣瀬 静香

陸連時報編集室

〒163-0717
東京都新宿区西新宿2-7-1
小田急第一生命ビル17階
公益財団法人日本陸上競技連盟 内
TEL 03-5321-6580
FAX 03-5321-6591
WEBサイト <http://www.jaaf.or.jp/>
公式動画サイト <http://japanathletics.tv/>